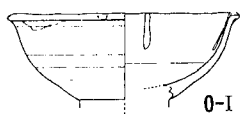


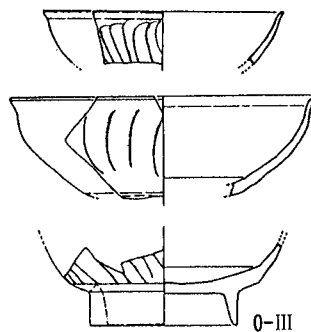
〔白磁碗〕



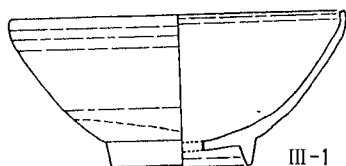
0-I



0-II



0-III



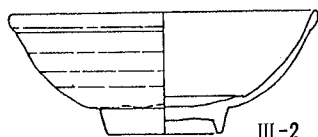
III-1



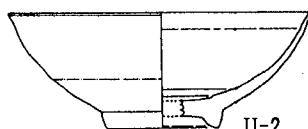
II-1



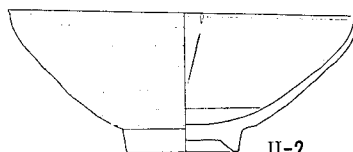
II-1



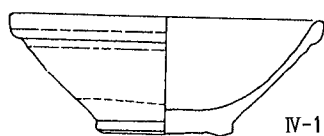
III-2



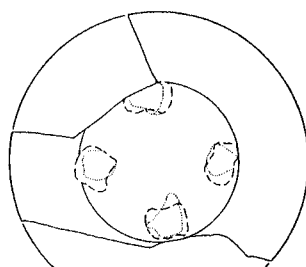
II-2



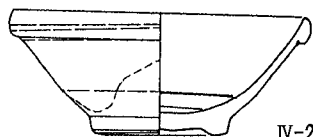
II-2



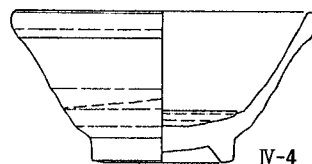
IV-1



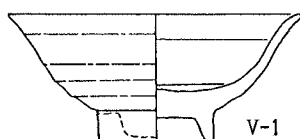
IV-3



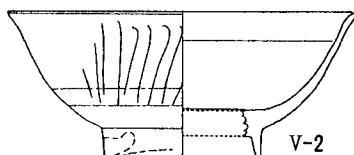
IV-2



IV-4



V-1



V-2

〔白磁碗〕

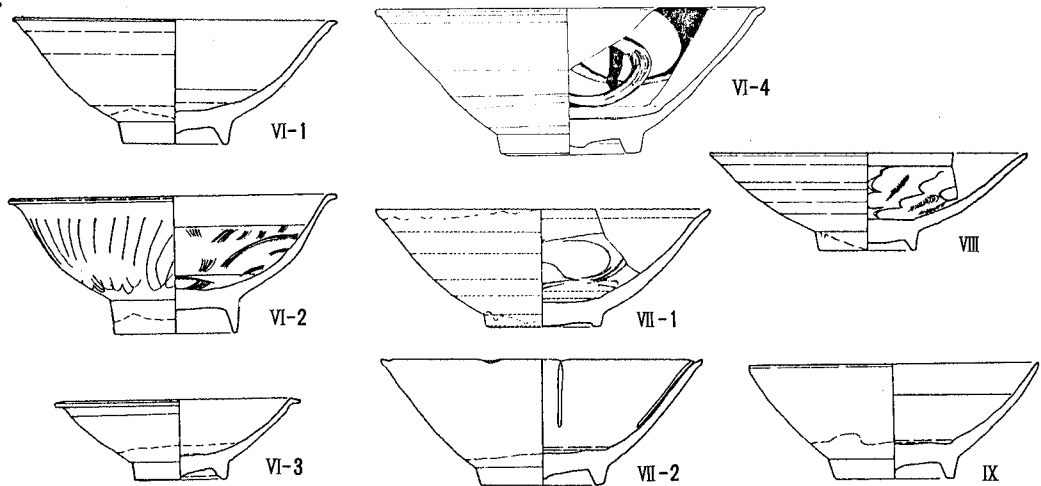
0類 0とは、いまだ例が少なく、はっきり位置づけできない、という意味での0である。また、これまで、多くの研究者に共通の認識を与えるような形で分類されたことがないという意味での0である。けれども今後の博多出土遺物の整理において、数項目を占めるであろうことは明らかで、仮に0番を与えてまとめておきたい。これまで目につくものに次の3タイプをあげることができる。これらは幾分古い遺物の多い地点で得られる例が目立つため、少し古いタイプなのかとの印象を持っている。

- 0-I類 半球型の体部で口縁の外半する小ぶりの碗。高台は高く垂直に立つ。口唇に刻みを入れ、又刻みの下で白堆線を入れて輪花を作るものもある。胎土は灰白磁質、釉は灰白色透明で氷裂はない。
- 0-II類 口縁が軽く外反する浅碗でやや小ぶり。高台は低く断面台形。器内に櫛描の短い曲線文を描くものが多い。胎土や釉はⅣ・Ⅴ・Ⅵ類と似る。
- 0-Ⅲ類 口縁で一度垂直に立て次に外反させながら先細りにつく。体外には片切彫で菊弁状の文様を施す。胎は黄味を帯びた白、釉は透明で柔い感じ。大小があり、又底部のわからないものが多いが、高台脇を削って体部と稜を作るものがある。

以下はこれまでに報告例が多く、よく知られているものである。すでに多くの人から共通の認識を得ているものが多いので混乱を恐れ、便宜上大宰府の横田・森田分類[※]を踏襲することとする。ただⅤ・Ⅵ・Ⅶ類に多少の変更があり、以下の番号もずれている。

- Ⅱ類 外面を直に、内面を斜めに削り出す高台が特長。胎土はやや砂っぽい。胎土・釉とも黄白～灰色を帯びるが、酸化気味で黄白色となるものの方がかなり多い。体外半釉。口縁が細い玉縁をなすもの(1)、口縁外反し、見込は段をつけて一段深く平らになすもの(2)があり、後者には白堆線で器内を大区分する例も多い。他にも少数ながらいくつかの变化形がみられる。
- Ⅲ類 高台はやや内すばまりでⅡ類に比してかなり高め。玉縁も幅広で薄めである。見込では器壁の側を削って沈圈線を造る結果、見込外縁が高くなる。胎土と釉はⅡ類に似るが、乳灰色に焼けた比率が高い。口縁が玉縁をなすもの(2)と丸くおさめるもの(1)とがある。
- Ⅳ類 口縁は折返し断面三角形の玉縁をつくる。半釉。稀に上質の白磁もあるが灰白色のものが多く、品質にはばらつきが多い。器底は肉厚で外底のくりはごく浅く、高台の幅は広いが面取されていて畳付はほとんどない。見込に沈圈線のないもの(1)、あるもの(2)に分けられる。又、重ね焼の跡のあるもの(3、4)もある。

※ 横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集4』1978



- V類 高台は高く、外面を直に内面を斜めに深く削り断面鋭三角形となす。胎は灰白色で粗く、釉は大むね貫入なし。品質多様、口縁外反。無文のもの（1）、器壁外面に縦線文を有するもの（2）、また器内面に櫛描の短い曲線文を配するものがある。
- VI類 口縁は外反し上面を鋭く水平に切る。品質は多様だが、大部分灰白色で精品は見ない。高台はVと似て高く、無文のもの（1）、外に縦線文、内に櫛描文のあるもの（2）などある。（3）は高台がやや低めで見込で輪状に釉を削りとり重ねやきするもの。（4）は（3）と同様の特長をもちながらかなり大形で、器内面に釉下褐彩がある。
- VII類 口縁は外反。比高は高くなく、高台も高くない。釉はほぼ高台までかかる。黄味を帯びた不透明の釉が多く。口縁に刻みを入れて輪花にするものが多い。器内にへらで花文に似た文様を描くもの（1）、白堆線で体を六区分するもの（2）がある。時に見込で輪状に釉切りをするものもある。
- VIII類 青白磁系統の器形と思われる。器内には弧を組み合わせた波状文と櫛描文を組み合わせるが、これも青白磁に見られるもの。図例で見込は広く平らであるが、多くは見込に小さな茶溜りを作る。釉はほぼ高台上まで。
- IX類 見込は広く平ら。器壁は直線的に斜行して開き、口縁で外側から微かに面取りする結果いくぶん先ぼそりに終わる。見込では輪状に釉を削りとり重ね焼をする。体外下半は施釉していない。胎・釉は灰白色でいくぶん濃いめのが多く、釉は貫入なし。

〔白磁皿〕

碗の場合と異なり、横田・森田分類を大幅に組み直している。

高台付皿

- I類 高台は低く、外底の削りも浅く、白磁碗IV類に似る。釉・胎は灰白色やや粗い。口縁

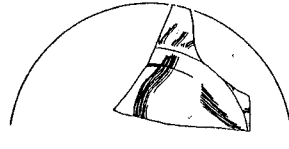
〔白磁皿〕 高台付皿



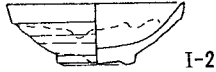
I-1



II



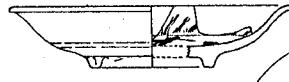
III



I-2



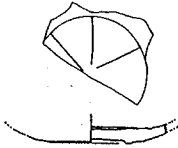
II



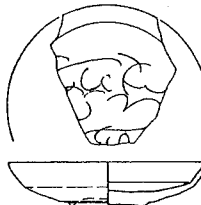
平底皿



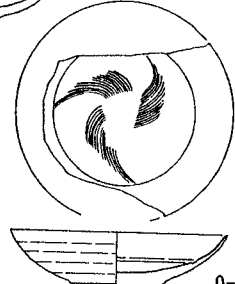
0-I



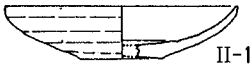
0-I



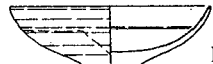
0-I



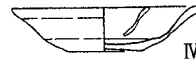
0-II



II-1



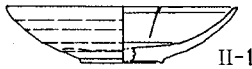
III



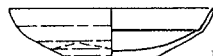
IV-1



V



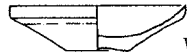
II-1



III



IV-2



V



II-2



VI-2

を丸くおさめるもの（１）と、口縁折返しで断面三角形の玉縁に作るもの（２）がある。

Ⅱ類 口縁肥厚ぎみで外反するやや平たい小皿。見込で輪状に釉を削り重ね焼をなす。輪高台がつき体外半釉である。釉・胎は灰白色だがかなり白いものがある。見込全面施釉のままのものもある。焼成時天井に積まれたものであろう。

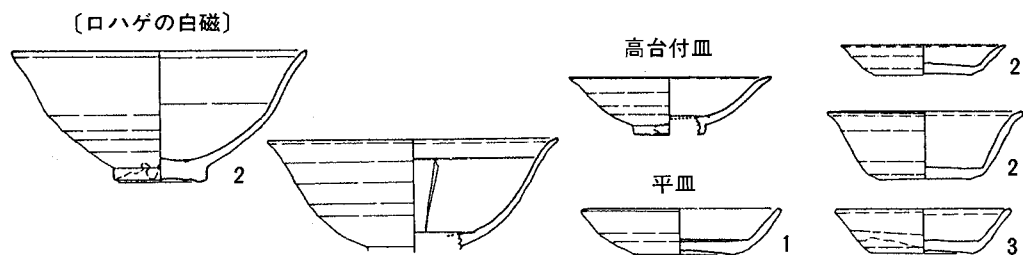
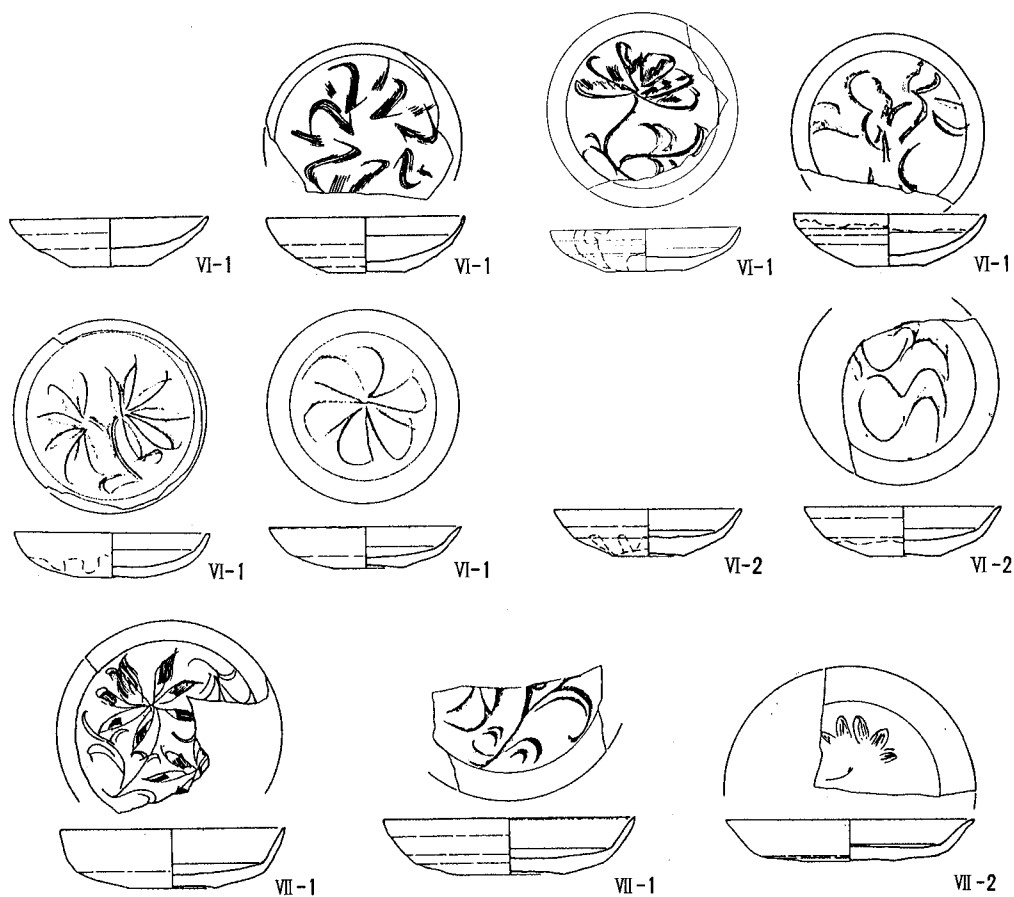
Ⅲ類 高台つきの中皿で、口縁外反。見込に櫛描文を施し、体部にもぐりと短い櫛描の縦線文をめぐるもの。灰白色の釉・胎で焼きはよい。

平底皿

0類 ここでも碗と同様の意味合で0類を設けた。極く低い高台もしくは高台の痕跡状の削りが見られるもので、平底皿は呼称として適当ではないが、Ⅱ、Ⅲ類との関連からここに入れる。

0-I 下記のⅢ類に似た形だが極めて低い高台が作り出されている。胎土はベージュもしくは灰色を帯びた細かい土、釉は淡いベージュ～乳灰色で半濁、細かい氷裂がある。施釉はおむむね高台脇までで、高台及び外底は露胎。櫛描文や線描文が見られる。

0-II Ⅱ類に似た形だが平底の少し上で軽く削りを入れる結果、痕跡のような高台が見られる。外底部のみ露胎で、見込にはいづれも櫛描の文様が見られる。胎は灰白色で淡いオリーブもしくは青灰色を帯びた釉がかかるが十分に熔けず濁っている。氷裂はない。



青白磁皿との関連を思わせる。

- Ⅱ類 見込から内湾ぎみに開く体部は幅広で、見込径と同じくらい。平底，口縁は先細りに細くなる（１）が，外反する例（２）もある。体部を白堆線で区分する例もよくある。胎土は粗く灰白色。釉はベージュ～灰黄色で細かい氷裂がある。体外半釉。
- Ⅲ類 Ⅱ類とよく似た釉・胎だが色はやや濃いめで，青みを帯びた灰濁色から黄味の強いオリーブ色まで幅広い変化がある。丸くくぼんだ見込は広く，薄い体部が沈圈線を境に角度を変えて立上がる。平底はⅡ類より小さく体部の幅は狭い。体外半釉。時になまこ風の曇あり，細かい氷裂。
- Ⅳ類 平底から直線的に斜行する体部の皿，器全体に施釉後外底を削る。灰白色の釉・胎だがかかなり白く，光沢あるものが多い。見込は体部側で削った沈圈線でかこむ。口縁が肥厚し体部を白堆線で区分するもの（１）と，口唇を斜めに切るもの（２）がある。
- Ⅴ類 平底から直線的に斜行する体部をもつ。見込と体部の境はなく口縁は肥厚する。体下半露胎。灰白～灰胎で灰緑～灰青色を帯びる釉がかかる。色は白磁としたものの中では最も濃い。氷裂はない。
- Ⅵ類 器形は基本的にはⅡ類に似るが，外底が広く削られるためかなり平たい皿となる。胎土は粗く灰白色。灰～空色を帯びた白濁色の釉はかなり厚め。外底のみ露胎のもの（１）で，劃花文を施すものが多いが，下半露胎のもの（２）も見られる。文様のパターンは図示した範囲をあまり出ない。
- Ⅶ類 やや大形で平らな見込から，体部が折れて立上がる。釉はよく熔けて光沢があり，氷裂はない。灰白色。焼きは安定している。印文（２）が大部分である。

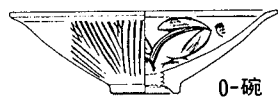
〔口ハゲの白磁〕

ふせ焼のため，口縁部の釉を削りとった碗や皿は，以上で見てきたものよりやや時代的に下がるものである。別にまとめて扱った。

碗 外反する口縁は釉を削り口ハゲとする。比高は高め。高台はやや小さく外底のくりは浅い。外底に釉のかかるもの（１，図例なし）と，かからないもの（２）がある。

高台付皿 無文で外底は露胎である。

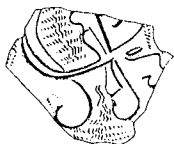
平底皿 ほとんど同じ厚さの平らな底部から折上げた体部をもつ。口ハゲがなく外底露胎のもの（１），口ハゲで外底の釉を拭いとるもの（２），口ハゲで底の少し上まで釉をけずりとるもの（３）がある。（３）は大きさは画一的で，底に他器の焼きついた跡のあるものが多い。



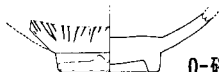
0-碗



0-碗



〔龍泉窯系青磁〕



0-碗



0-皿



0-皿



0-皿

碗



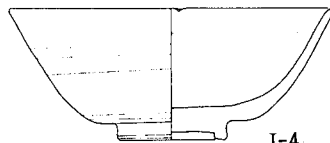
I-1



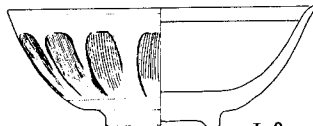
I-2



I-3



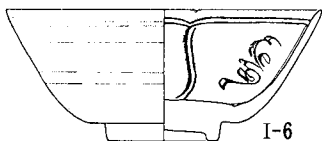
I-4



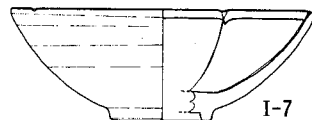
I-8



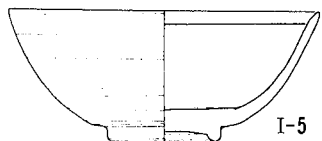
I-5



I-6



I-7

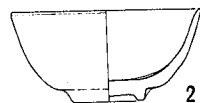


I-9

小碗



1



2



3



3

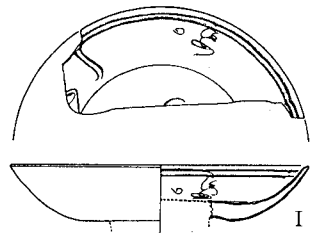
〔龍泉窯系青磁〕

龍泉窯の青磁については最近の窯跡調査報告^{*}により、かなり詳しく分類・分期がなされているが、博多での出土品の現状では、器形的にはっきりとらえることのできるのは「山頭窯と大白岸」の第Ⅶ層以降のもので、それ以前のものも破片の文様からは存在するように思えるが、器形として確認することができない。ただ第Ⅸ層からⅩ層のものは外面に線条文を施すため、比較的認識しやすい。そのため、線条文を有するものを例によって0番でくくり、それ以降のものをⅠ類とまとめて考えることとした。

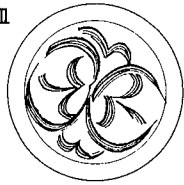
- 0類 小ぶりの碗、碗、高台付皿がある。釉は薄くガラス質で、器外面の線条文や、内面の文様でも櫛目の使用が目立つ。しかし文様面からは同安窯系のものとよく似ており、釉質もいま一つはっきりとせず分別に混同があるものと思われる。
- Ⅰ類 器底厚く、外底は畳付から露胎である。文様は大別して、花文（2）、水波文（3、4）、蓮花折枝文（5）、雲文（6）、輪花（7）があり、概して古いタイプには櫛目文が多く使用されるようである。また器外に脈入り蓮弁を施すものもあり、小ぶりで器内蕉葉文の（1）は古く考えられるが、（8）のように古くないものもある。また、内外面無文（9）のものもある。小碗や高台つき皿もあり、平底皿も大部分この期のものである。小碗には仮高台のもの（1）、口縁が直に立ち上るもの（2）、腰が折れて口縁を輪花にするもの（3）などがある。平底皿は櫛様の器具で草文を描くもの（1）、片切彫の魚文のもの（2）、片切彫の蓮花に櫛目の入るもの（3）、片切彫で蓮花を描くもの（4）、無文のもの（5）がある。
- Ⅱ類 器外壁に蓮弁を彫刻するもので、鑄入りの複弁（1）、線彫単弁（2）が大部分を占める。器内は無文だが、稀に蓮花折枝文のあるものもある。ほとんどが碗である。
- Ⅲ類 全面に厚く施釉し、畳付のみを削って露胎としたもの。碗は多くなく、小鉢や盤の器形が多い。

※緊水灘工程考古隊 浙江組「山頭窯与大白岸」『浙江省文物考古所學刊』1981

高台付皿



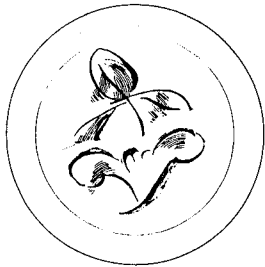
平底皿



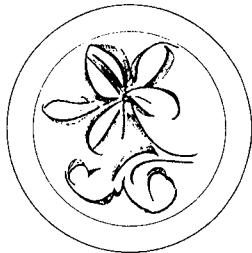
I-1



I-2



I-3



I-4

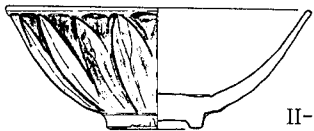


I-5

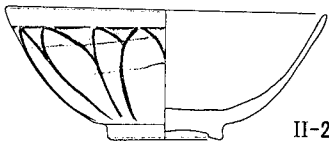
碗



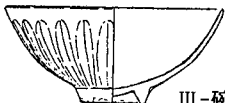
II-1



II-1



II-2



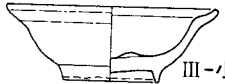
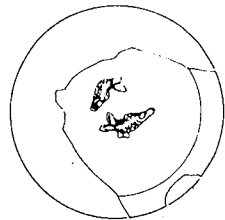
III-碗



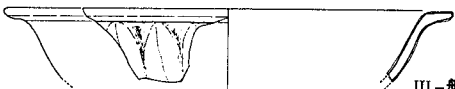
III-杯



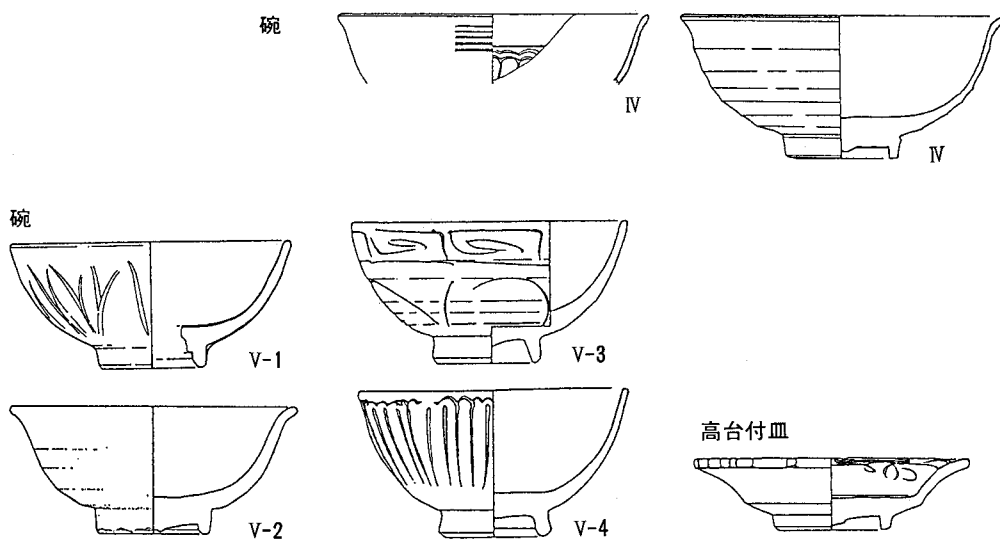
III-小鉢



III-小鉢



III-盤

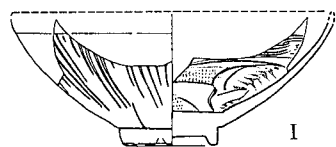


IV類 一般に十四世紀の龍泉窯と称される青磁は、全形を知りうる例は少ないが、破片としてボチボチあるので、項目を設けておきたい。新安出土の龍泉窯青磁のタイプや、器内面に枢府系の文様や花文などが、細かく印陽刻されるもの。また、口縁端反で細かくスカラップを入れるものなどがここに入る。

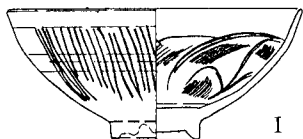
V類 器壁が立ち上がり、口径の狭まる碗形で、全体に施釉し、外底の中心の釉を削るか、外底で輪形に釉を削るものである。線彫りの蓮弁をもつもの(1)、無文のもの(2)、雷文帯のあるもの(3)、菊弁を彫るもの(4)がある。またこの期には高台付稜花皿がある。(この2の例では畳付と高台内は無釉)

〔同安窯系青磁〕

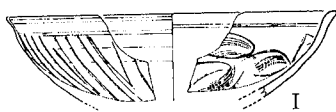
碗



I



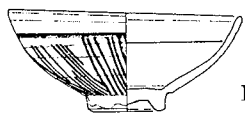
I



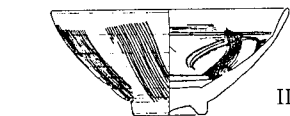
I



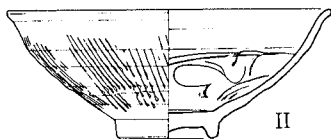
I



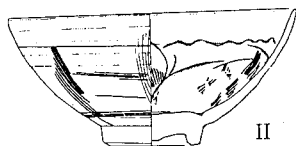
I



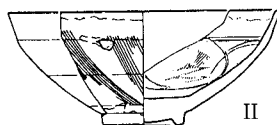
II



II



II



II

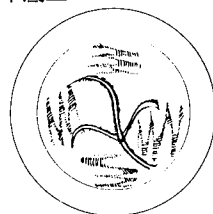


II



II

平底皿



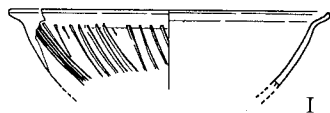
I-1



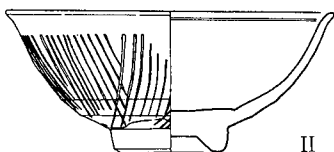
II-1



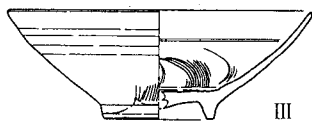
〔その他の青磁〕



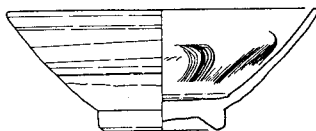
I



II



III



III



IV

〔同安窯系青磁〕

同安を中心に福建省各地で焼成されたもので、決して一様でない。釉がガラス質であることを最大の要件とみて、抽出を試みた。碗・平底皿が主で、高台付皿もあるが稀である。

碗

- I類 釉は高台もしくは高台脇までかかり、畳付及び外底無釉。外底は平らに削られている。胎は灰色で粗く、釉はオリーブ色もしくは青緑がかったりオリーブ色で釉層は厚くない。ガラス質は強くなく、おおむね氷裂は見られない。体外壁に片切彫で放射状に縦線を刻む。
- II類 施釉は体外半釉。釉は透明ガラス質を思わせ、淡オリーブ～淡灰青色あるいは淡灰黄色。外底の作りは無造作な削りっぱなしである。体外壁には櫛様の器具を用いて放射状に縦線を刻む。上に比して粗製である。

平底皿

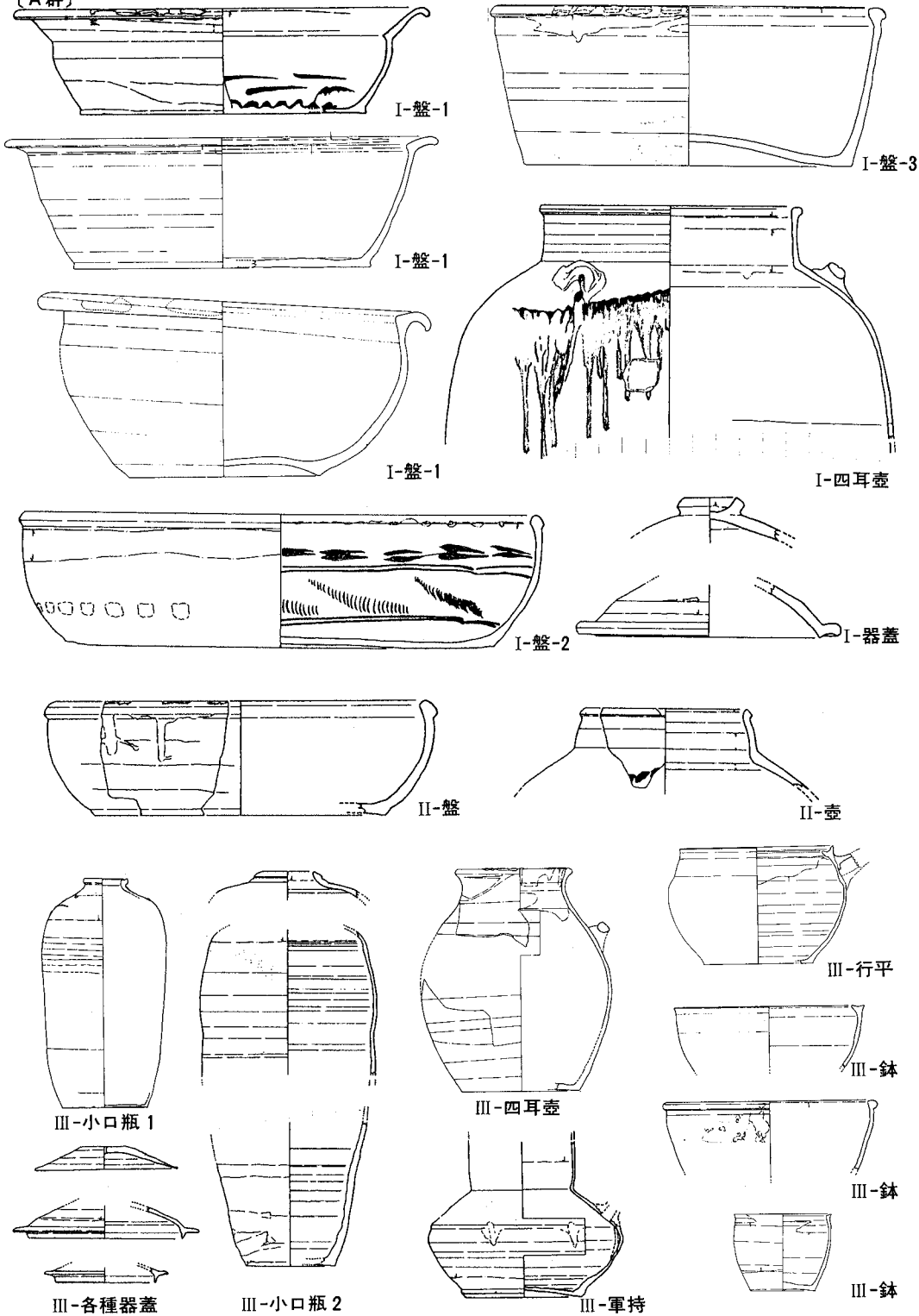
平らな広い見込から外反ぎみの短い体部が立上がり斜行する。底部は龍泉窯系平底皿に比し薄く、外底は広い。全面施釉ののち、外底を削り露胎とするもの（I類）と、下半露胎のもの（II類）があり、それぞれに文様のあるもの（1）と無文のもの（2、図例なし）が見られる。文様は櫛描を主体とする。

〔その他の青磁〕

他にも、各種の青磁が見られるが、越州窯系、耀州窯系、高麗青磁以外にも次のようなものがある。

- I類 口縁を大きく外反し、最後に軽く起す。灰胎は黄がかったオリーブ色で細かい氷裂がある。ガラス的。体外は粗い櫛で斜めに平行線を入れるが、体内は無文、粗悪な青磁である。
- II類 器壁も底造りも非常に粗厚で、口縁は軽く外反する。体内で口縁下に一本沈線をめぐらす。体内無文のものと、III類と同じような櫛描きの弧線文のものが見られる。見込で輪形に釉を削り取るものが多い。体外壁は粗く太い猫掻きが施される。またへらで大きく片切彫を入れるものもある。釉はオリーブ色で氷裂なく、釉層は薄い。半釉。
- III類 器壁はかなり直線的に斜行する碗である。見込で輪形に釉を削りとり重ね焼きをする。器内壁に櫛で大きく弧線を描く施文がみられる。体外に櫛で猫掻きを施すものもある。釉は黄みがかったものや、よく熔けず灰黄色のものが多い。一般に焼成はよくない。
- IV類 見込に小さな茶溜りを作る、小碗。体内には弧もしくはらせん様の線文があり、体外に細い縦線を施す。胎は白っぽく小孔多し。釉は微かに青みある透明釉。

〔A群〕



陶器の分類

主として胎土により、三ないし四のグループに大別できる。この分類はある程度、生産地域と対応しているのではないかと考えている。

〔A群〕 ベージュから灰ベージュの非常に細かい土が基本で、小形のものはこの土を主とし、大形になると、灰～暗灰色の砂っぽい土が次第に多く混じるように見える。このうちいくつかのものは福建省泉州郊外磁灶窯^{*}のものとされており、いずれもこの周辺で生産された可能性が強い。

Ⅰ類 黄釉陶器 灰～暗灰色の砂っぽい土に、ベージュの細かい土がつなぎのように入っており、のびはよく薄胎になる。釉下鉄彩の見られる例が多い。器形は広い罎口縁や、細い折返し玉縁口縁の盤大小、蓋、四耳壺がある。盤では施釉は通常体内と体外上半にみられ、口縁で拭きとって重ね焼きをしている。中に化粧土の見られる例もある。

Ⅱ類 黄釉陶器 乳褐～暗灰色のかなりねっとりした土に白や褐色の砂粒が混じる。釉は灰オリーブ色不透明。口縁細縁の盤と壺がある。盤では釉は口縁までで、それ以下は鉄漿を塗ったように赤褐色を呈している。壺は肩に褐釉がかかるがⅠ類のような流しかけではなく、筆描きである。いずれも口縁で釉をふき、重ね焼きの砂跡を残す。

Ⅲ類 比較的小形で、非常に薄手のものである。釉色は上のⅠ、Ⅱ類に比べて濃いものが多く金茶～黒褐色のものが多い。

褐釉小口瓶 1 細長い徳利型の瓶で、平底の底径は7cm、ほとんど広げずに体を挽きあげ、肩を丸く作って短い頸を立て、口は断面四角の折り返し口縁とする。器高は約17cm、肩から上に褐～黒褐色の釉がかかり、肩には通常4箇所白い砂目が付いている。胎土は灰ベージュ色で細かい黒色がまじり、露胎は茶がかかる。器壁は薄く、器内壁には粗いろくろ目が段をなして残っている。

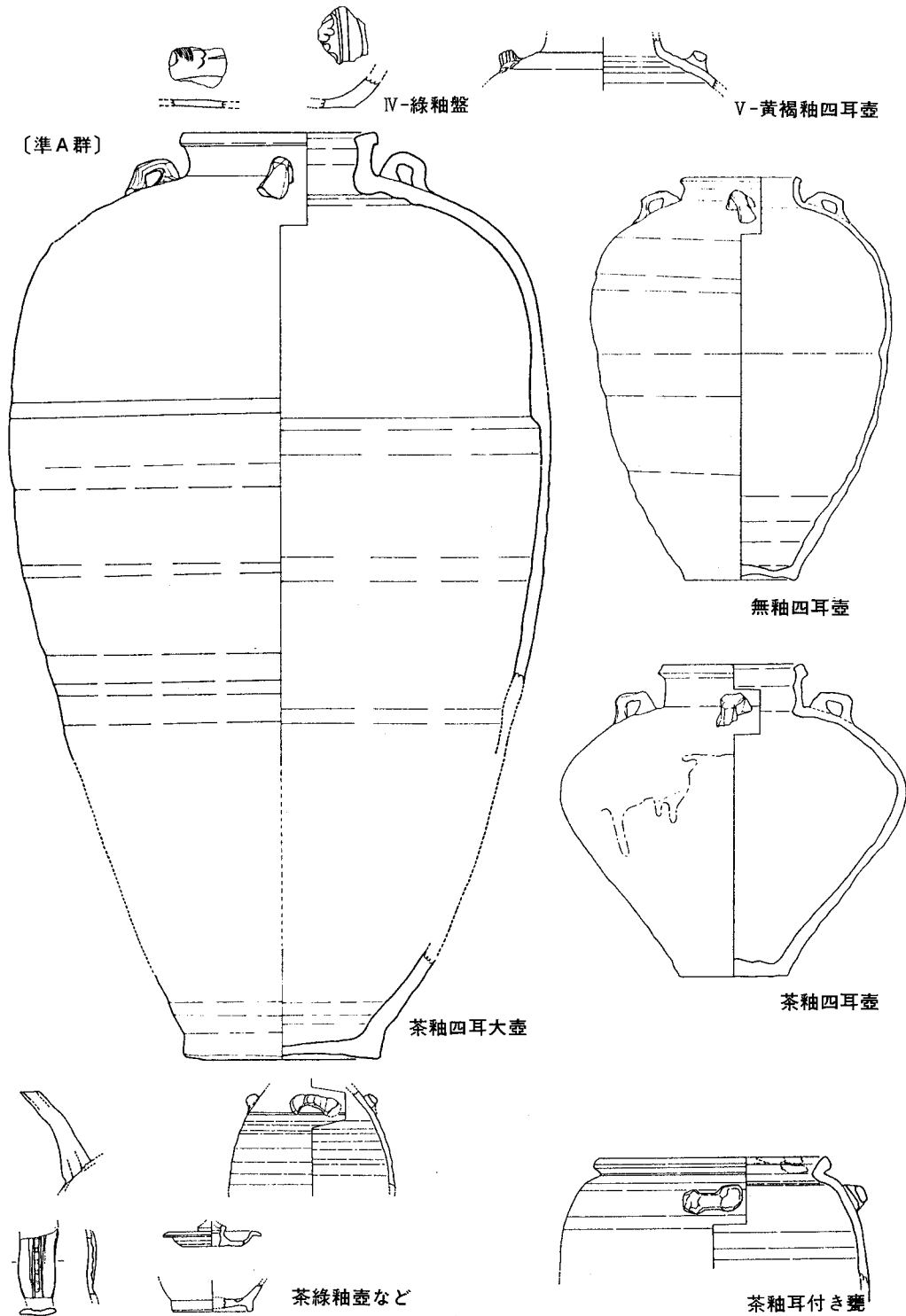
褐釉小口瓶 2 より大形で頸はなく、微かな折り返し口縁がつく。器壁は幾分厚めである他は、釉・胎、造作とも1によく似ている。相似の瓶は福建省泉州港で発掘された宋代末の海船から得られており、磁灶窯曾竹山窯の焼成になる酒瓶であろうことが報告されている。南方では出土例が多い。

黒褐釉軍持 釉・胎とも上の小口瓶によく似る。南方向の器形といわれる軍持である。

黒褐釉行平 口縁に受け口がつき、器の内部にのみ黒褐釉を施す薄手の器である。両側に面取をした取手のつくもの、注口のつくものがある。胎は赤茶っぽく、焼き締まっている。

Ⅳ類 緑釉陶器 Ⅰ類と同じような胎に緑を主とし、部分的に橙～褐色を見せるペンキのよ

※ 泉州海外交通史博物館調査組「晋江县磁灶陶瓷史調査記」『海交史研究』2, 1980



うな光沢のある不透明釉のかかった盤がある。口縁は細縁である。

- V類 黄褐釉四耳壺 灰色のがさついた土にベージュや黒の小さな砂粒がまじる。短く立った頸に強く折り返した口縁，横耳のついた肩部，頸と肩の境の突帯，そして体部の破片には波状文が見られる。釉はオリーブ色。体全面に波状文を繰返す四耳壺と思われる。I類の壺と異なって厚手のこの種の壺には，肩に花文をスタンプした例なども出土しており，広東省の窯の名もあげられている。

〔準A群〕 灰色に焼ける砂っぽい土で，釉は不透明でペンキのような質感を持つものが多い。A群によく似るが，同一ということは一応保留しておきたい気分がある。

茶釉四耳大壺 灰～灰ベージュ～橙黄色を呈する土に白や黒の砂粒が混った粗い胎である。紐造りろくろ成形か。腹部数か所でつぎ高さ70cm前後になる長形の壺である。外に茶色の釉が薄くかかるが剥落も多く，剥落の跡は灰色を呈している。口の折り返しに変化があるが，細分するだけの資料はまだない。平底である。大形のせいか破片数は非常に多く目立つものである。

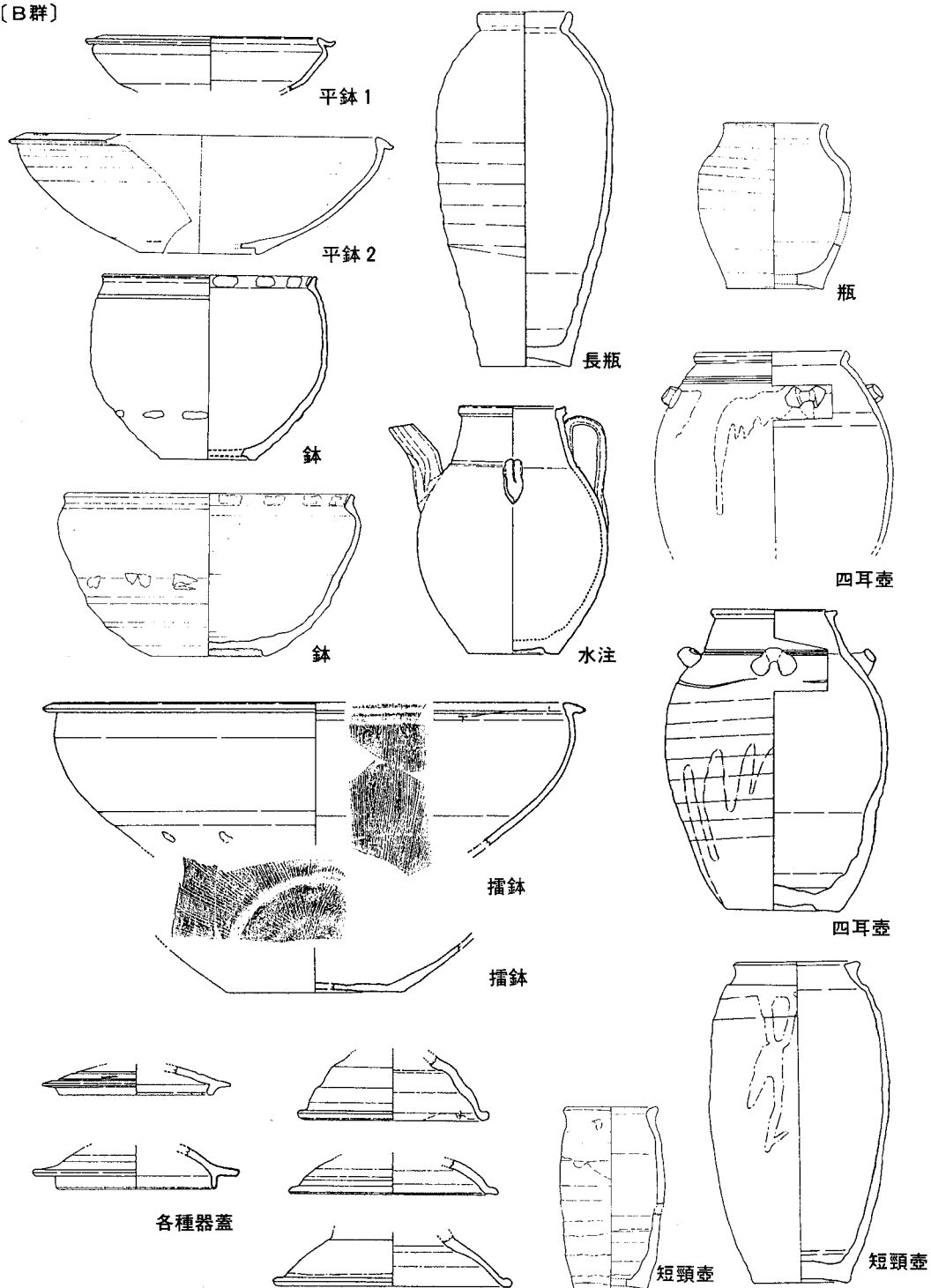
無釉四耳壺 灰ベージュ～暗灰色の土に白い砂が混じる。露胎は茶色を帯び，白ごま，黒ごまが浮く。器形は上に似るが小形，施釉の跡は見られない。これも口づくりにはかなりの変化が認められる。韓国新安の海底遺跡，佐賀県の靈仙寺遺跡から似たものが得られている。

茶釉四耳壺 上と似るが，肩から下で急に細くなり，低い器高となる。肩には茶釉をかける。これも靈仙寺に例がある。

茶緑釉壺など胎土が灰色あるいは灰白色で半磁質の一群がある。釉は茶緑～黒褐色で薄くかかる。水注の注口，取っ手があり，蓋，底部なども同一の質感がある。

茶釉耳付き甕 口縁が「く」の字形に外反する広口の甕。肩に横耳が付き，口縁内側に重ね焼きの砂目がある。土は灰色で粗いが均質。釉は艶消し不透明な茶色。

〔B群〕



〔B群〕土は明茶～暗灰色まで、さまざまな階調があるが、かなり緻密でセメントを思わせるところがある。釉も茶オリーブ～灰オリーブ色に発色するものが多く、総体として粗青磁、もしくは青磁の流れをくむ陶器としてとらえることができる。越州窯青磁の地域のものか。種々の胎土の色や釉色は、焼成時の窯内の状況によって現われる変化であろう。器種ごとに大体似た傾向が見られるようである。とはいえ、中には褐釉以外に名づけようのない物もあり、これを分離できるかどうかを将来の課題と考えている。

平鉢1 口で内弯し、口縁を外に折り下げて鐙を造る平小鉢である。土は暗灰色で細かい点がみられる。灰オリーブ色の釉がかかる。

平鉢2 上に似るが、折り返した口縁は体壁に付き、肥大口縁になっている。土は明茶～淡褐色で、細かい褐点が混じる。淡茶～灰オリーブ色の釉がかかる。碁笥底である。

鉢 平鉢2よりは濃い色の土で褐色の点が見られる。茶色の釉が薄くかかる。また土が暗灰色、黒点混じりに焼けているものもあり、この時釉はオリーブ色に発色している。大小があり口縁の形に多少の差があるが、いずれも底は碁笥底、口縁部と胴半ばに重ね焼きの目跡がある。

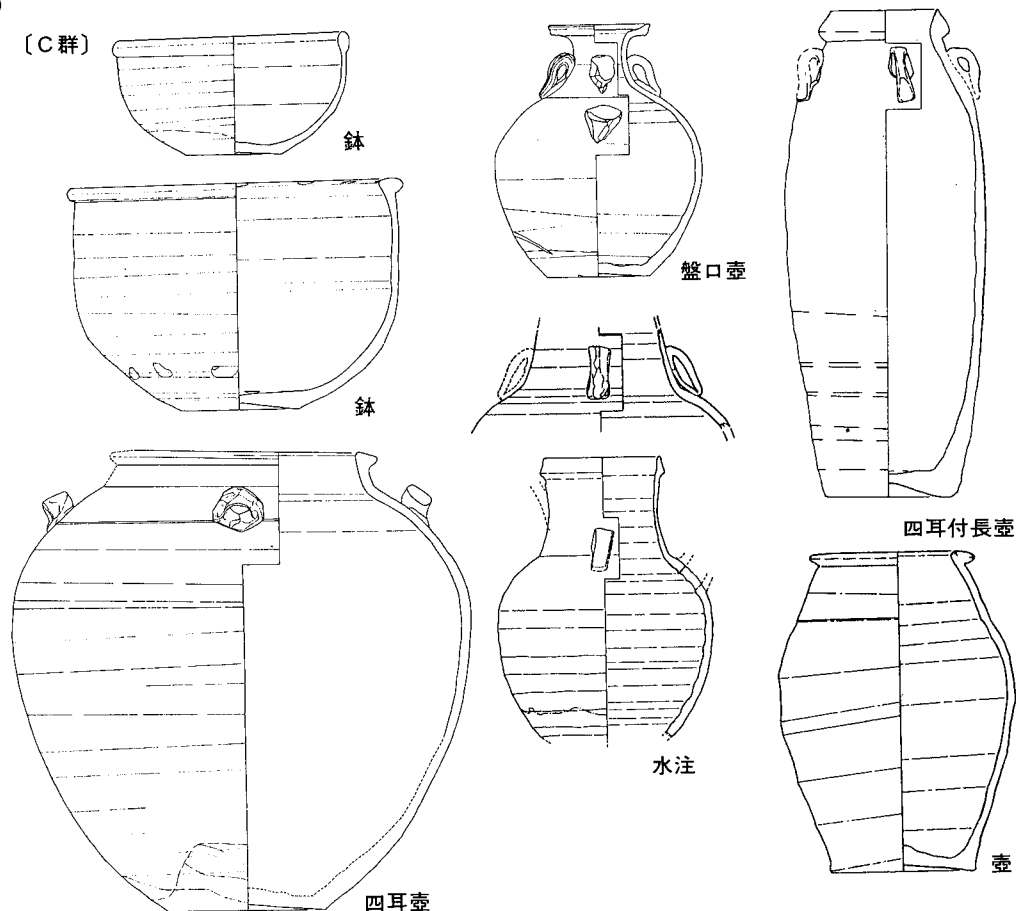
擂鉢 赤茶～黒灰色で白い砂が少し混じるかなり精良な土で、内面に茶オリーブ色の釉がかかる。露胎は茶褐色。内面には細めの筋が無雑作に立てられている。口と器外下半に重ね焼きの白い砂が付着している。

長瓶 灰オリーブ色の釉がかかる瓶である。器の内外から外底まで施釉するものと、底にまでかからないものがある。土は灰白色で磁質を思わせるものから、上の鉢に似たものまでさまざまである。佐賀県霊仙寺では経筒や蔵骨器として用いられたものが多数発見されているが、当遺跡でも破片数は少ない。

四耳壺・壺・水注など 暗灰色に黒点の入る土に灰オリーブ～茶オリーブ～褐色を呈する釉がかかる。総体によく熔けず濁った感じの色である。広口、広底の壺で器高の中位に最大径があり、よく分化しない頸が形ばかりマークされている。肩には沈線で波形を描くものが多く、横耳、縦耳のもの、また注口のつくものなど、変化がある。底も外底部をくるが、畳付きの幅に大小があり、将来細分が必要であろう。

褐釉短頸壺 平底からあまり広がらずに挽き上げた細長い体部で肩で段をつけて頸に移る。頸は短く垂直に立ち、口縁を折り返して肥厚させた広口の瓶である。茶緑～黒褐色の釉が器内から頸、肩の辺までかかる。口唇部に重ね焼きの跡がある。土はミルクチョコレート色で緻密、褐色の点が混じる。器の外壁はなでである。破片の例は少ないが、福岡市の門田二号墳では完形品が出土している。

〔C群〕

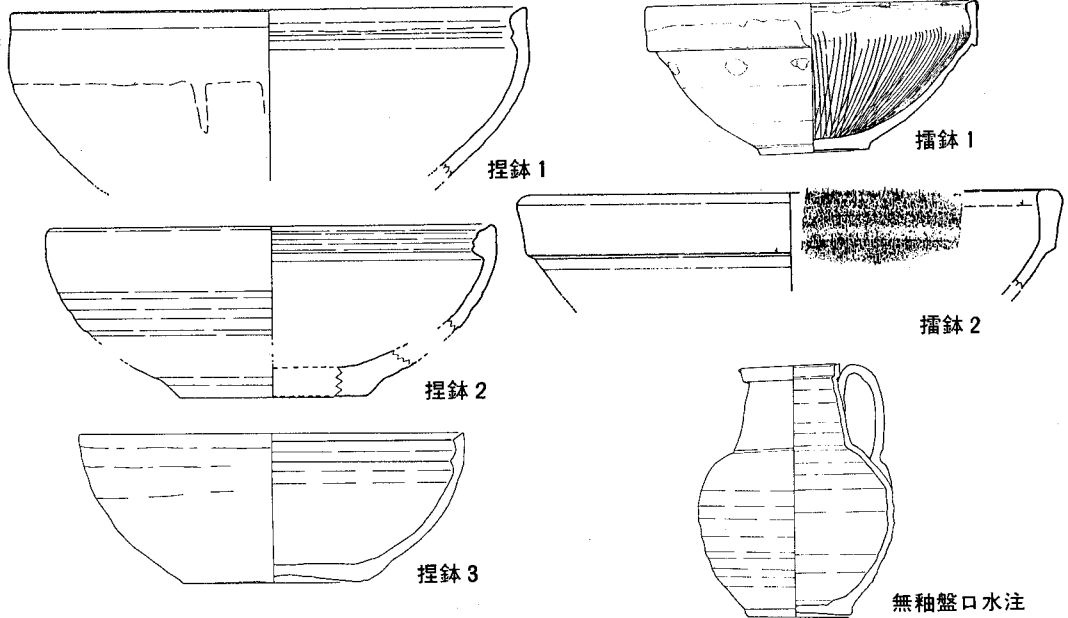


〔C群〕土は緻密で赤褐色～灰褐色を基盤として、擂鉢などには大粒の砂を混ぜている。また大形の壺や甕にも砂を混ぜる。釉は黒褐色が基本で少々オパール現象をみせるものがある。大形の器形には灰オリーブ色の釉のかかるものもある。揚子江下流域のものか。

鉢 折り返しの玉縁口縁をもった甕。口で重ね焼きをするが、玉縁全面に施釉されるもの、口唇の釉を削り取るもの、更に口縁の下でも釉を削るものなどに細分される。土は赤褐～茶褐～黒褐色を呈し挟雑物は少ない。茶緑～紫褐色など濃い色の褐釉がかかる。盤口壺や大形四耳壺も同質の釉・胎のものである。

褐釉耳付き壺、あるいは水注 赤茶～黒褐色の土に褐～黒褐色の釉がかかる。取っ手や耳の跡が見られ、水注と思われる。これも施釉された口の上に直接重ねて焼いた傷痕があり、露胎のままの平底にも重ねた器物の釉や胎の一部が付着している。

四耳付長壺 茶褐～黒褐色の均質な土に粉のような白点が少し入り混じる。褐色の釉はなまこ風になりやすい。長胴で頸ははっきりせず、折り返し口縁に特長が見られる。



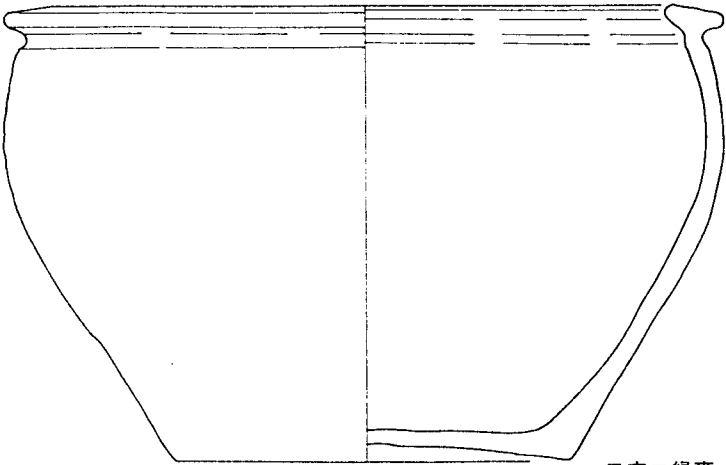
口の立ち方に变化があり、あるいは時代差を示すものか。当遺跡では小片のみで明らかにできないが、一般に四耳がつき、施釉は器の内外にわたる。口唇に直接重ねて焼いたために傷痕の残るものが多い。我国では経筒として用いられた例もあり、また伊万里湾周辺で大量に発見されたことが知られている。新安の海底遺物にも類似品があり、江蘇省の南宋墓からも似た壺が出土している。宜興附近では明代まで骨壺として使用されていたともいい、この辺りの製品かと推察される。

壺 器高の中位で最大胴径を計るこの壺の口径と底径はほぼ同じで、底から $\frac{1}{4}$ の高さで一本の沈線により形ばかりの頸部を作り出す。鐐状の口縁の上部は釉を削り取り、重ね焼きをしている。胎土は灰褐色やや粗く、黒色不透明の厚い釉が全体にかかり、鈍い光沢のある表面には鉄錆が浮いている。

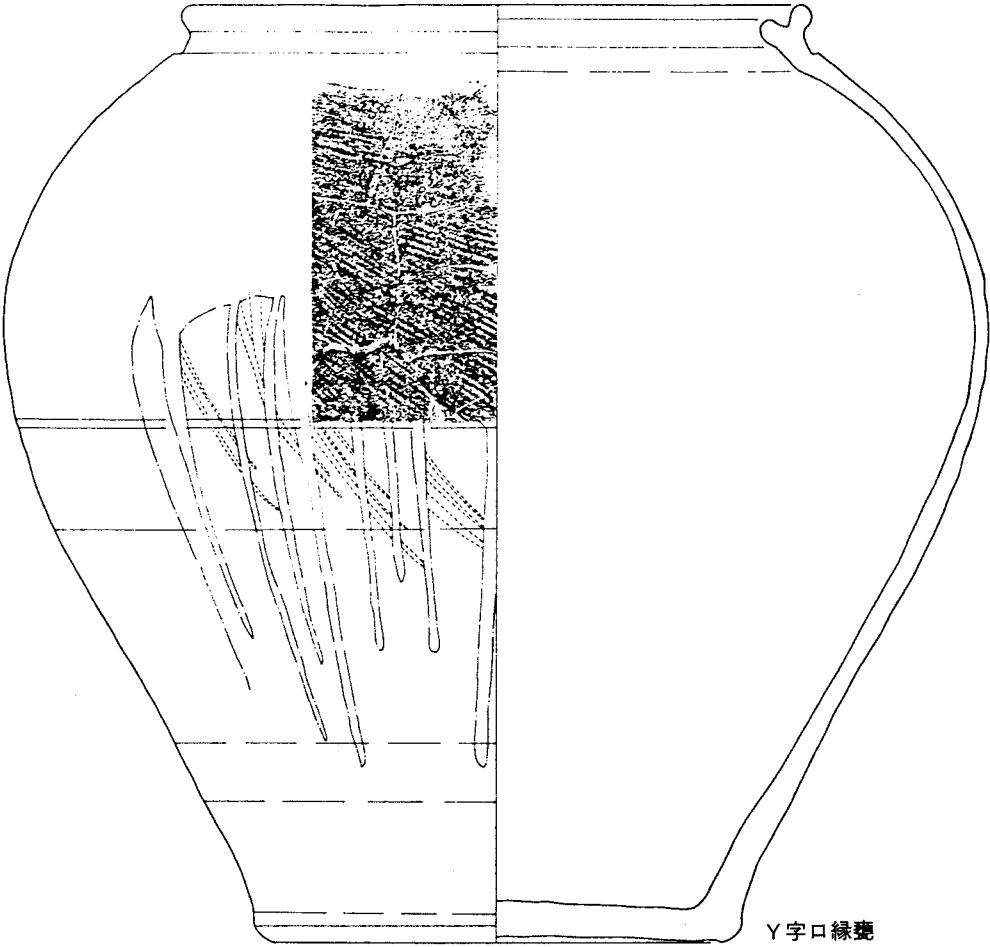
捏鉢 1 灰黒～暗褐色の粗い土に白黒の砂粒がたくさん混じる。口縁と体外上半部に土灰～灰オリーブ色の釉がかかる。多くはよく熔けず不透明。露胎は鉄錆色で、口には蓋受け状の段がある。平底。

捏鉢 2 褐～暗灰色の粗い土に白黒の砂粒が多く混入。無釉で露胎は茶褐色。外面に斜めの叩き目があり、口には細かい段がある。

捏鉢 3 赤褐～黒褐色の土に石灰様の柔らかい感じの白い大粒の砂が混じる。露胎は鉄錆色である。口縁を内に折り返し、口縁と口縁下で二本の隆帯を造り出している。底は雑な平底。器の内面は搗粉木を用いたように表面磨滅し、胎内面の黒ずんだ色が出ている。径20～40cmと大小あり、破片数もかなり多い。



T字口縁甕



Y字口縁甕

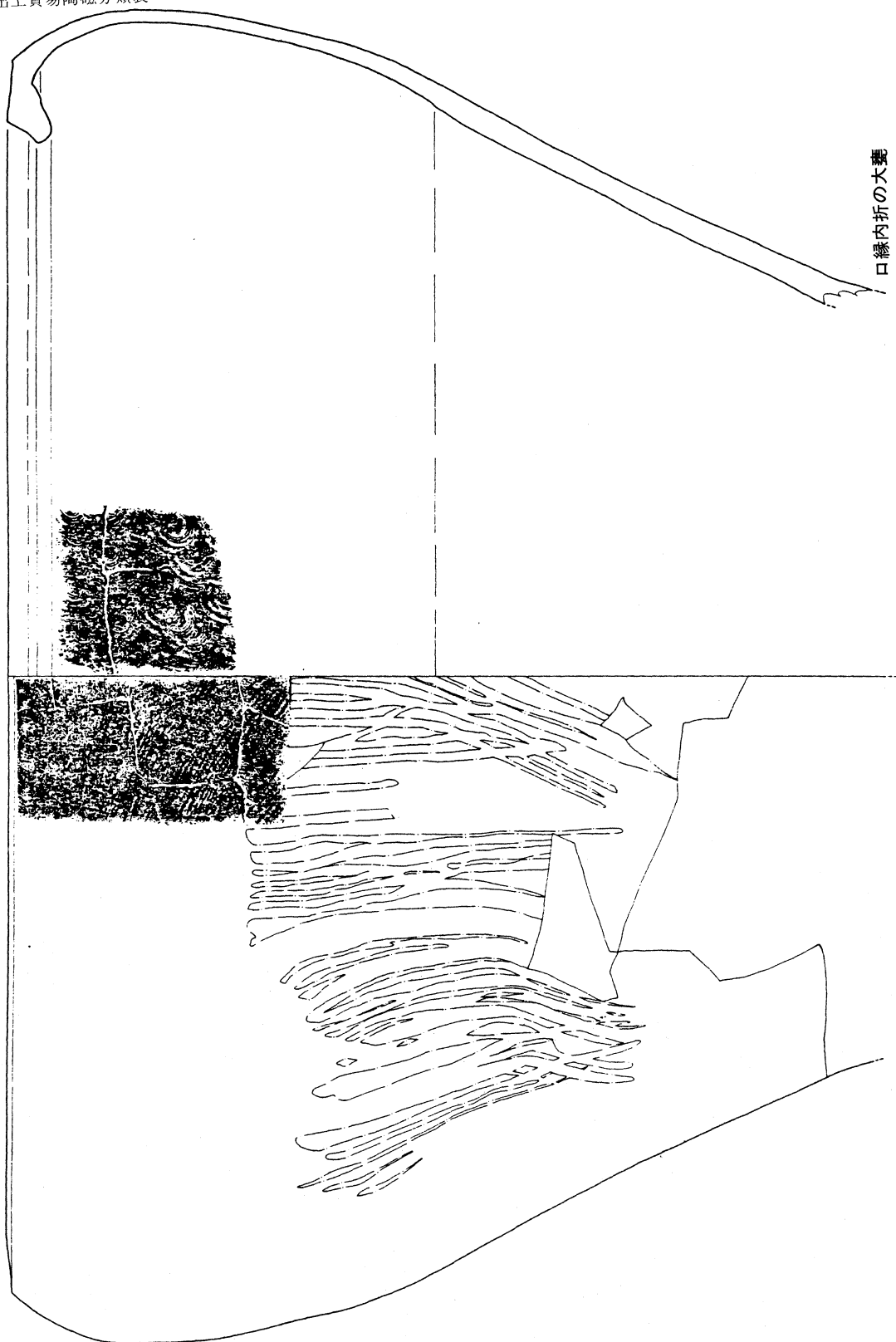
擂鉢 1 赤茶～暗灰色の粗めだが均質な土。折り返し口縁には褐釉が施され、目跡がつく。2より小形で平底。施釉部以外は鉄漿を塗ったように茶褐色を呈している。筋目はいく種類かが見られるが、櫛目の単位ごとに多少間隔の見られるものが多い。

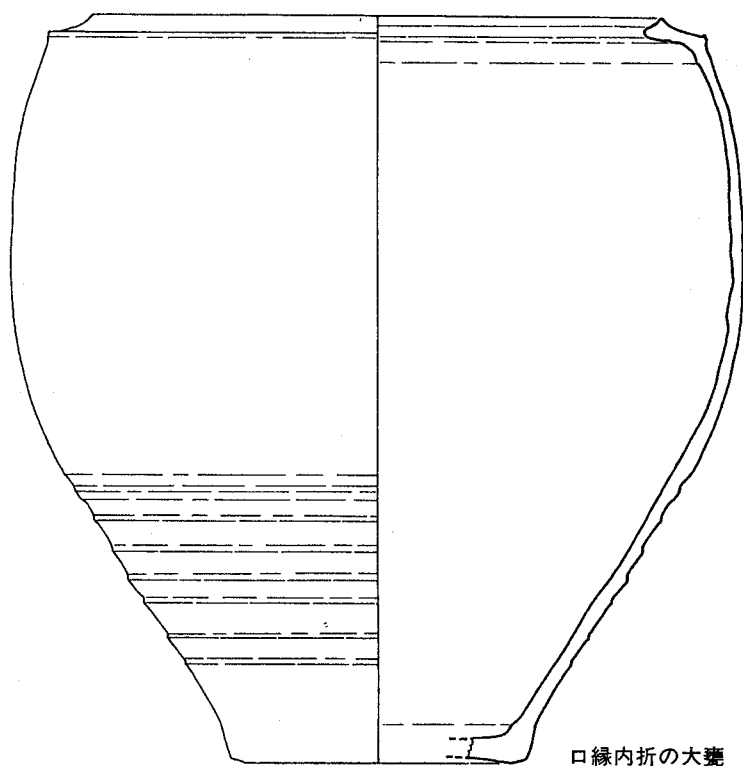
擂鉢 2 灰褐～紫褐色の土に白い砂粒がたくさん入る。1に似た土である。口縁は外に幅広く折り返し、ここにだけ褐釉をかける。口には白い目跡があり器内には細めの筋目が全体につく。

無釉盤口水注 暗褐色の土に白い砂が多く混じっている。露胎は鉄錆色。例の多くは、埴埴に用いたか内面に銀化した空色のガラスが付着し器体は焼けて紫灰色となりガサガサしている。盤口の一か所をつまんで注口をつくり、それと反対側に取っ手をつける。底は円盤状である。

T字口縁甕 口縁下を僅かにくぼめて小さな頸を造ったような甕である。赤褐色のガサツとした土に白や茶の砂が混じっている。器内に同心円の叩き目があり、褐色の釉がかかる。この釉は口縁ではオリーブがかった灰黄色の濁った色を呈し、次頁と同じような釉であることがわかる。

Y字口縁甕 受け口を造るように口縁が二つに分かれる。土は粗く灰～茶色で大小の白砂がたくさん含まれ、所々に焼滓のようなガサガサした黒い塊がみられる。釉は灰オリーブ。よく熔けず粉を混ぜたように見える。

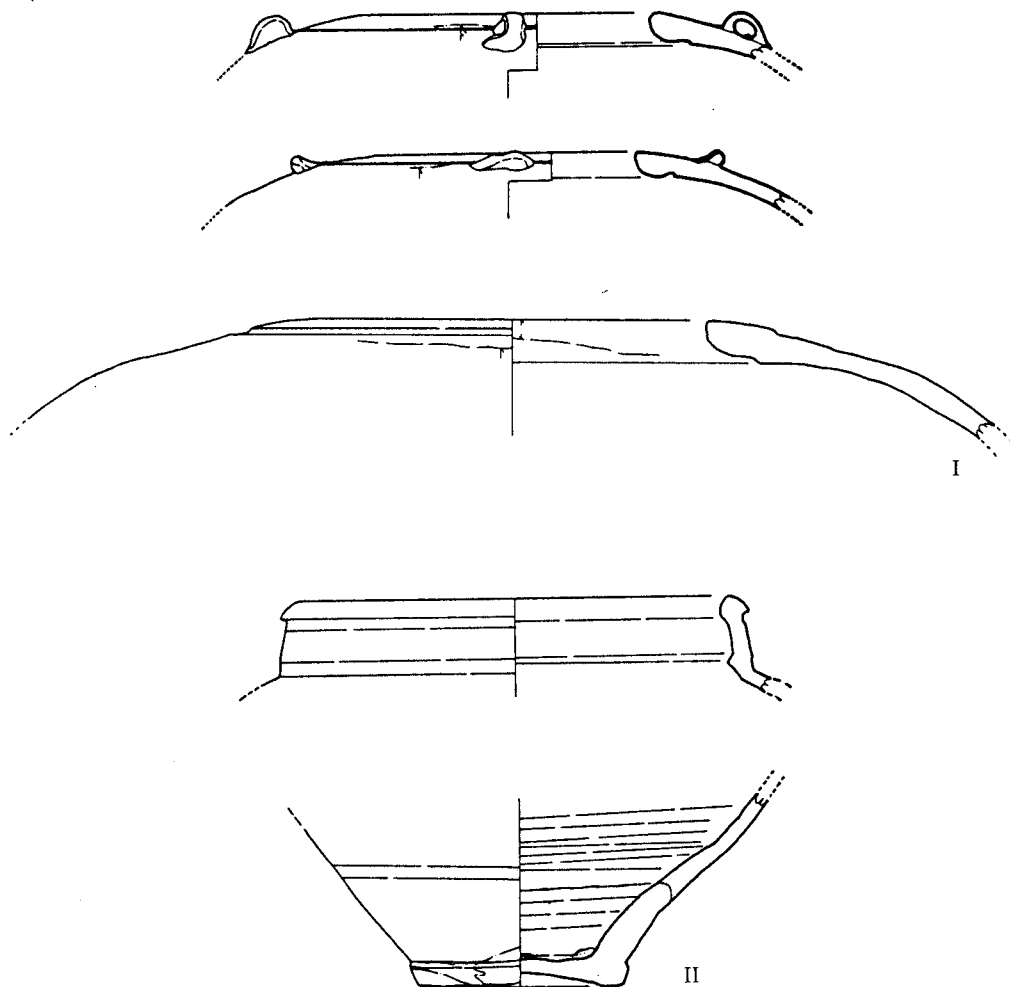




口縁内折の大甕

口縁内折の大甕 口縁部を内へ屈折したこの様な甕は、かつて大宰府で全形を知りうる上図の例を出している。左ページの例は非常に粗胎で灰色のガサツとした土に白い砂が混じり、所々に大きな黒い鉄滓のような塊が見られるなど、前項とよく似ている。釉は暗オリーブ色。多くの例では赤褐色の土に石灰様の白砂混じり。オリーブがかった灰色のよく熔けていない釉が見られる。内壁に叩き目がある。

〔その他群を構成するに至らない大形容器〕



〔その他群を構成するに至らない大形容器〕

- I 類 頸無し四耳壺 下半を知る資料はないが、上半は半球形をなす壺である。口縁に段をつけ、直下に耳をつける。縦耳の例、横耳の例がある。胎土は一般にピンクがかった赤茶色で石英、長石の砂混じりであるが、黄白色のものも時に見られる。釉は茶緑～褐色でなまこがかかるものが多い。体外口縁下から施釉。
- II 類 短頸壺 灰褐～黒褐色の粗い土に大小の白い砂がびっしり含まれている。釉は茶オリープ色のものや黒褐色で少し灰色に曇るものがある。叩きの有無は分らない。